

平成 22 年 度

国 語 (マークセンス) 試 験 問 題

(人文・社会科学専攻)

(注 意)

1. 解答用紙に、例にならって受験番号を必ず記入すること。
2. 試験時間中は、すべて試験係官の指示に従うこと。
3. 解答方法

例

| | | | | | |
|----------|-----|---|---|---|---|
| 受験 番号 | 神奈川 | 理 | 1 | 2 | 3 |
|----------|-----|---|---|---|---|

氏名を記入してはいけない。

解答は、解答用紙に次の例にならって記入すること。

- ① 例えば、 と表示のある問題に対して(3)と解答する場合は、次の(例)のように解答用紙の の(3)の○にはっきりと×印を記入すること。
(例) (1) (2) (3) (4) (5)
 ○ ○ ⊗ ○ ○
- ② (3)に×印を記入したあと、(5)に解答を変更する場合は、次の(例)のように(3)の⊗をぬりつぶし、(5)の○にはっきりと×印を記入すること。
(例) (1) (2) (3) (4) (5)
 ○ ○ ● ○ ⊗
- ③ (5)に×印を記入したあと、再度(3)を解答とする場合は、次の(例)のように(5)の⊗をぬりつぶし、(3)の●のうえにはっきりと大きな×印を記入すること。
(例) (1) (2) (3) (4) (5)
 ○ ○ ~~●~~ ○ ●
- ④ ×印を記入しないものや、二つ以上記入したものは、誤りと同じに取り扱う。

この部分に記載されている文章につきましては、著作権上の問題から掲載することができませんので、ご了承承願いたします。

(松岡正剛氏の『フラジャイル』による)

* (注) コローデイ——十九世紀のイタリアの作家。『ピノッキオの冒険』の作者。

村田珠光——室町時代の茶人。「わび茶」の創始者であると言われている。

古田織部——戦国時代の茶人。千利休の茶道を継承しつつも、大胆かつ自由な気風を茶道界にもたらした。

ロココ——十八世紀のフランスを中心に流行した、優美さと繊細さを重んじる美術様式。

キュビズム——二十世紀初頭、ピカソやブラックによって生み出された美術の潮流。ルネサンス以来主流化した一点透視図法を否定し、複数の視点から

対象の形態を再構成することを目指した。

フェティッシュ——人体の一部分や生命のない物品を愛好する傾向(フェティシズム)があるさま。呪物崇拝的な。

兼好——吉田兼好。

賀茂の祭——京都の賀茂御祖神社と賀茂別雷神社で毎年五月十五日に開催される祭り。京都三大祭りの一つ。

ミッシング・リング——「ミッシング・リンク (missing-link)」のことか。失われた環。一定の連続性が予期されている事象に関して、そこに非連続

性が見出された場合におけるそのすき間のこと。

1

傍線部(1)～(5)までの漢字の読みとして、本文の論旨に照らして、誤っているものは次のどれか。

- (1) 些 細——ササイ
- (2) 風 靡——フウビ
- (3) 公 家——クゲ
- (4) 溯 行——サツコウ
- (5) 結 託——ケツタク

2

文中の空欄を補う語として、本文の論旨に照らして、最も適当なものは次のどれか。

- (1) 威圧的な完成感
- (2) 網羅的な粗雑感
- (3) 啓蒙的な公正感
- (4) 品質的な粗悪感
- (5) 感覚的な違和感

二重傍線部へ部分は全体よりも偉大なことがあるのの説明として、本文の論旨に照らして、最も適当なものは次のどれか。

- (1) ある対象における部分は、時としてその全体という総合的な範疇には属さないままで、その対象が具備している論理的な統合性を補完するような力を、全体に対して強力に発揮することがあるということ。
- (2) ある対象における断片として示された、不完全性や欠損性を多く抱えている部分の方が、説明的な全体よりも、その対象の魅力を味わい、その本質を洞察する上で格段に有効である場合が多いということ。
- (3) ある対象における部分 \parallel 断片は、総合的な意味を示す全体から排除された領域であるのだが、それは現実の枠組みに限定されがちな全体に比べて、豊かな想像力の可能性をより多く孕んでいるということ。
- (4) ある対象における統一的な意味を示す全体よりも、その全体としての意味を全く別の角度から相対化する可能性を持った部分の方が、その対象が放つ豊かな魅力の源泉となっている場合が多いということ。
- (5) ある対象における部分というものは、その全体が示す概念とは相反する性質を発揮して秩序を攪乱するものである故に、全体が醸し出すものとは異質な、思いがけない美を生み出すことがあるということ。

本文の論旨に照らして、最も不適当なものは次のどれか。

- (1) フラグメントはほとんどの場合未完成であって何らかの欠落を抱えたものであり、実体としてのそれは現実社会においては軽視されがちだが、それが醸し出す不完全さの感覚は、芸術表現においては決して無意味なものではない。
- (2) 全体と部分との関係について、ウィリー・サイファーは、部分は必ずしも全体の秩序に従属するものではないとしているが、「不完全さ」という要素は、時にその対象が発散する表現的なりアリティを増大させる触媒ともなり得る。
- (3) 筆者は幼少の頃からフラグメントを愛玩する個人的な嗜好を持っているのだが、その嗜好のかたちは、一般的には否定的に捉えられがちな「はんちらけ」の感覚を好んだ、吉田兼好における異端者の美学とも通底するものである。
- (4) 探偵小説の魅力は、物語にちりばめられた不完全な断片が物語の全体に統合されて全ての謎が解明されたその瞬間に生まれる爽快感にあるのだが、そこでは断片という要素が喚起する想像力の可能性が特に有効に活用されている。
- (5) 現代社会における教育や社会的常識は、巨視的視野において把握されるべき全体性を重視することが多いのだが、芸術や伝統文化が生み出してきた美的な快樂は、そのような全体性によって全て形作られているという訳ではない。

この部分に記載されている文章につきましては、著作権上の問題から掲載することができませんので、ご了承願います。

(坂部恵氏の「風の通り路」による)

* (注) シャーマニズム——シャーマン (霊と交流する職能者) を介して霊的存在と交流し、託宣や治療等を行う宗教現象。

天籟——天然に発する響き。風が物に当たって鳴る音。

「共感覚」^{システマツ}——特定の刺激に対して、通常の感覚と同時に、それと異なる種類の感覚が生じるという特殊な知覚現象。例えば、ある一定の音を聴くと同時にそこに特定の色を知覚する現象 (色聴) などが挙げられる。

「共通感覚」——最初は異なる種類の感覚を相互に比較、区別する統合的な感覚能力を指すものだったが、その後、人間に普遍的である統合的な把握・判断能力という意味で用いられるようになった。

5

傍線部の片仮名(1)～(5)にあてはまる漢字として、本文の論旨に照らして、誤っているものは次のどれか。

- (1) 寓話
- (2) 莊調
- (3) 灼熱
- (4) 伝播
- (5) 息吹

6

文中の空欄Aと空欄Bを補う語として、本文の論旨に照らして、最も適当なものは次のどれか。

- (1) A 伝達 B 抽象化
- (2) A 創出 B 物語化
- (3) A 凌駕 B 象徴化
- (4) A 昇華 B 具象化
- (5) A 贈与 B 可視化

7

本文中の〈舞踊〉に関する説明として、本文(三浦雅士の引用文を含む)の論旨に照らして、最も不適当なものは次のどれか。

- (1) 舞踊とは、それを行うことにより人間が身体的共通性を発見していったところの文化行為である。
- (2) 舞踊とは、その踊り手も観客も巻き込んだ生命的一体感を共有するという自他の同調作用である。
- (3) 舞踊とは、身体を超えた精神的な同調の感覚を外界に対して実現するという形而上的運動である。
- (4) 舞踊とは、環境に対する模倣とその動作の反復によって自他の境界を曖昧にしてゆく行為である。
- (5) 舞踊とは、人類を取り巻く環境と互いに呼応するための場所を発見してゆく創造的な営為である。

本文の論旨に照らして、最も適当なものは次のどれか。

- (1) 「風」という漢字は、本来は人と環境とが相互浸透する場としての風の特質を示した象徴的な文字であり、「鳳」のような神話的ニュアンスを持った語彙に限らず、様々な慣用句や日常の語彙の中でその特質が活用されている。
- (2) 水というイメージに生の無常観を投影したような歌はあまり詠まれていないが、風というイメージに関しては多くの歌が詠まれており、そこには人間の感覚とイメージとの相関性をめぐる本質的な洞察が見事に示されている。
- (3) 「共通感覚」は、アリストテレス以来の哲学的な概念であって、その意味は西洋思想史において一貫して変わることのない普遍的なものであったのであり、そこには「ふれる」という日本語のニュアンスとの共通性も見出せる。
- (4) 「ふれる」という言葉には、あらゆる雑多な感覚を排除して「いのち」の本質に迫るといふ、生命の原体験と言うべき高次元の精神性が象徴化されているのだが、それは人間にとって常にポジティブな感覚であるとは限らない。
- (5) 「風薫る」という言葉には、人間の日常的な身体感覚とは全く別次元にある「いのち」の本質が見事に形象化されているのであり、それは生命の原初的なイメージを凝縮した、まさに「いのち」が相互浸透する空間なのである。

A かな、かも 「あゆひ抄」^{*}かなかも、全く同じ心の詞なり。中むかしよりは、やうやう疑をかもとよみ、^{ながめ}詠をかなとよむ^{ならひ}習となれり。かなは^{ながむ}詠る意、かもは三笠の山にいでし月か、さても、と疑ふ意なり。

B まし 「あゆひ抄」に、世の中にたえて桜のなかりせば春のこころはのどけからまし、^{ウモシ}と里言をあてたり。⁽¹⁾蕉門の俳諧は俗談・平話を専門とすれば、ましといへる詞、いと稀^{まれ}なり。「^{*}続虚栗」^附思ふほど物笑はまし^{ウモシ}花の隅 其角

C めり 「あゆひ抄」その大むねをおしはかりて、⁽²⁾つかねいふ心あり。里言の、オモムキヂヤ、ヤウスヂヤなどいふに似たり。
「古今」^{*} たつた川もみぢみだれてながる^{ルキウス}めり^{ルキウス}わたらば^{にじき}錦中やたえなむ

D やは これは理を我よりは決せずして、きく人の心に決定を発せさする詞也。かはやは、同じ類の詞なれども、その落着かははサウデハナイと決定し、やははサウデハアルマイと落着する也。これ自然と、やとかとの差別にて、かくはなる事なり。「古今」春の夜の闇はあやなし梅の花色⁽³⁾こそみえね香やはかくるる」。かくれはせぬと、心かへりて落着するなり。

(曲亭馬琴編・藍亭青藍補『増補俳諧歳時記栞草』による)

* (注) あゆひ抄——富士谷成章(一七三八―七九)の文法書。

続虚栗——俳諧書。貞享四年(一六八七)刊。其角編。

古今——古今和歌集。

(付記) 本文中の傍線は、もともと原文にあったもので、問題作成のため後から引かれたものではない。

本文Aについての説明として、本文の論旨に照らして、最も適当なものは次のどれか。

- (1) 「かな」と「かも」は全く同じ感情から発するものであったが、ようやく「かな」は願望、「かも」は反語と解釈するようになった。

- (2) 「かな」と「かも」は全く同じ感情から発するものであったが、ようやく「かな」は願望、「かも」は疑問と解釈するようになった。

- (3) 「かな」と「かも」は全く同じ言葉から派生したが、しだいに「かな」は詠嘆、「かも」は反語の意味に変化した。

- (4) 「かな」と「かも」は元来同じ意味であったが、しだいに「かな」は詠嘆、「かも」は疑問の意味に変化した。

- (5) 「かな」と「かも」は元来同じ意味であったが、しだいに「かな」は願望、「かも」は疑問の意味に変化した。

波線部(1)の現代語訳として、本文の論旨に照らして、最も適当なものは次のどれか。

- (1) 松尾芭蕉の一門の俳諧は、日常の題材・用語を専ら使用するので、和歌と比べ「まし」の使用例は極めて稀である
- (2) 松尾芭蕉自身の俳諧は、日常の題材・用語を専ら使用するので、和歌と比べ「まし」の使用例は極めて稀である
- (3) 松尾芭蕉の一門の俳諧は、日常の題材・用語を専門に学ぶので、俳句と比べ「まし」の使用例は極めて稀である
- (4) 松尾芭蕉自身の俳諧は、日常の題材・用語を専門に学ぶので、俳句と比べ「まし」の使用例は極めて稀である
- (5) 松尾芭蕉の一門の俳諧は、日常の題材・用語を専門に学ぶので、連歌と比べ「まし」の使用例は極めて稀である

「めり」の語義を説明した波線部(2)「つかね」にあてるべき漢字として、本文の論旨に照らして、最も適当なものは次のどれか。

- (1) 束ね
- (2) 塚ね
- (3) 突ね
- (4) 使ね
- (5) 仕ね

波線部(3)の現代語訳として、本文の論旨に照らして、最も適当なものは次のどれか。

- (1) 色こそ見えないで香りも隠れることがあるか、いやない
- (2) 色こそ見えないで香りも隠れることがあるか、そうではないだろう
- (3) 色こそ見えないが香りは隠れることがあるか、そうなってほしくない
- (4) 色こそ見えないが香りは隠れることがあるか、そうではないだろう
- (5) 色こそ見えないが香りは隠れることがあるか、いやない

齊の景公 子貢に謂いて曰く、「子 誰をか師とする」と。曰く、「臣 仲尼*を師とす」と。公曰く、「仲尼賢なるか」と。対えて曰く、「賢なり」と。公曰く、「其の賢なること何若」と。対えて曰く、「知らざるなり」と。公曰く、「子其の賢なるを知りて、而して其の奚若なるかを知らず、可なるか」と。対えて曰く、「今 天を高しと謂わば、無少長愚智皆知高。高さ幾いくかは、皆『知らず』と曰う。是を以て仲尼の賢なるを知りて、而して其の奚若なるかを知らず」と。

〔説苑〕による

*〔注〕 仲尼——孔子の字。

13

傍線部「無少長愚智皆知高」の書き下し文として最も適当なものは次のどれか。

- (1) 少長愚智無くして皆高きを知る
- (2) 少長愚智無くんば皆高きを知らん
- (3) 少長愚智皆高きを知る無し
- (4) 少長愚智と無く皆高きを知る
- (5) 少長無くして愚智皆高きを知る

14

空欄に入る語として最も適当なものは次のどれか。

- (1) 何
- (2) 爆
- (3) 遠
- (4) 莫
- (5) 程

15

二重傍線部において、「知らざるなり」と子貢が答えた理由として最も適当なものは次のどれか。

- (1) 孔子が賢者であることは十分わかっていたが、天のように偉大だとまでは決して言えないと考えたから。
- (2) 孔子は先生なので一旦賢者であるとは答えたが、真に賢者と言ってよいか多少疑問の余地があったから。
- (3) 孔子が賢者であることは十分認識していたが、それを強調しすぎてトラブルが発生するのを恐れたから。
- (4) 孔子を賢者であると景公が認識しているのを知ってそうは答えたが、そうではない面も知っていたから。
- (5) 孔子が賢者であることは肌身で感じていたことだが、その偉大さの度合が計りしれないと思われたから。